

この世の苦しみ

平成二十四年二月二十日加茂法話会

我々は魚を捕り殺して、料理をする。鱗を取り、頭を打ち落とす、腹を裂いてハラワタを出し、鉄串に刺して裏表を火に炙り、コナゴナに食べて、骨は捨ててしまおう。

酒井得元先生は、自我とは「オレが」と言う自分。「オレが」という自我は初めから（自分）というものがあって、その自我が何々したいというのではなく、逆に何々したいというところから、自然に自我が生まれて来るのです。

そうして自我が形づくられると、今度は自我が主体となって我々をひきづり回すことになる。こういう生活を自我。自我生活を徹底しているものを、これを凡夫という。普通の人間の行為の事を私は凡夫という。

自我生活のところには必ず目的を持っている。目的があるから失望する。目的がなかったら失望しませんし、得意になる事もない。幸福ということも目的にならなっている時だけが幸福で、目的がかなえなかつたら奈落（地獄）の底でしょう。それだけのこと。これが人間生活の当たり前の事で、なんでもないことです。

自我生活をしている時、こういう模様があるのが当たり前で、これをなくそうというのは間違いです。

これをなくそうとおもうのであれば、まあ、飯を食わん方がいいでしょう。その代わり命の保証はしませんよ。人間というものは、決して身体と離れることは出来ない。

何一つ持っていないものは失う心配がない、地位・名誉・富・年齢・健康・不足の無い者の生き方、お釈迦様の生き方である。